

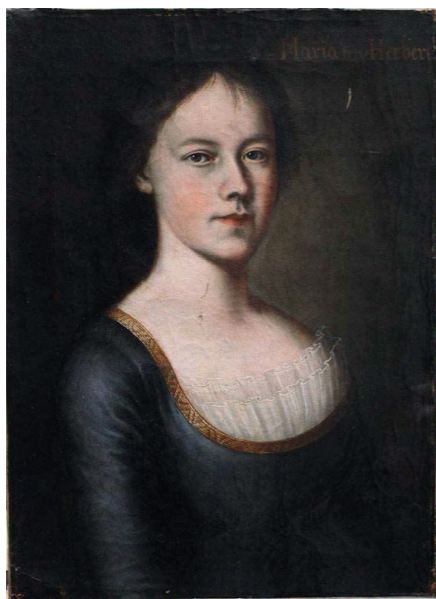
## 友情と打ち明けの哲学 哲学

ヘーゲルの主著『精神現象学』における「主人と奴隷の弁証法」は、命を賭けて自分自身を承認させることができた自由な主人が、今度は奴隷のもたらす労働生産物に依存することでもはや自由でなくなり、逆に命を賭けたくない不自由な奴隷は、主人に提供するための生産物のうちに自己直観を行い自由になる、というプロセスを描いている。こうした苛烈な印象を与える「承認をめぐる闘争」の哲学はフランクフルト学派第三世代の哲学者アクセル・ホネットによっても継承されている。このホネットの哲学において承認と社会的連帯は重要な位置づけをもつが、彼は繰り返し友情について語っている。

アリストテレスは誰も友情なしでは生きようとはしないだろうと述べ、その友情論は現代でも影響力をもつが、近代ドイツの友情観は古代の政治的友情とは若干異なる。18世紀後半のドイツにおいては、書簡を通じた繊細な内面の打ち明けを含む言説様式が広まり、カントは友情における打ち明けの重要性と、打ち明けがしばしば諸要因により抑制されるという問題を論じている。そして現代を生きる哲学者ホネットは『自由の権利』において、そうした打ち明けを核とする友情の社会的形式はいまや競争的な職業的生活によって脅かされていると指摘する。なぜこれが大問題なのかというと、こうした打ち明けを行わずに内面に留めておくことが常態化すれば、差別、ハラスメント、いじめ、格差などをはじめとする広範な社会的不正の経験が共有されず覆い隠され、そうした不正に立ち向かうための連帯の可能性さえ出てこないからだ。

みなさんにはすぐに悩み事を相談できる友人がいますか？

真田美沙 准教授



友情と打ち明けに関するカントの議論にきっかけを与えた  
マリア・フォン・ヘルベルト

## 『源氏物語』の細やかな言葉の使い分けから 物語を展望する

日本文学

私は『源氏物語』における「きよら」「きよげ」という美しさを表す語の使い分けについて研究しています。一般的には「きよら」は「第一級の気品ある美」、「きよげ」は「第二流の美」、「さっぱりした美しさを表」（鈴木日出男『源氏物語ハンドブック』三省堂）す語であると説明されています。

『源氏物語』におけるこれらの語は明確で非常に複雑に区別されており、『源氏物語』以前に成立した『竹取物語』や『うつほ物語』と比較しても明らかです。『源氏物語』は言葉選びが細やかで、言葉の使い分けに敏感で優れています。光源氏のような主人公の絶対美は、専ら「きよら」と称賛されており、紫の上のようなヒロインや帝なども同様です。

同一人物に「きよら」のみ、または、「きよげ」のみであれば単純ですが、両方用いられている場合があります、非常に難解な問題となっています。ただし、私たちの分野では単に語の使い分けを考察することだけが目的ではありません。「きよら」「きよげ」という語の用法からも物語の語られ方や構造、他作品との語られ方の差異などの一端を見ることができ、国語学と日本文学領域の融合を試みています。これらの語の用例だけでなく、関連する語の全用例やヒントになりそうな場面などを幅広く見る必要があります、緻密な作業になります。結論に至る手がかりを探るのは大変ですが、使い分けが少しずつ見えてきたり、それが大きな問題を解くきっかけになると分かってきたりすると、楽しさと達成感を強く感じます。

みなさんもこの日本文学研究室で深い知見を身に付け、興味関心を共有する仲間と意見交流しながら明らかにしたいテーマを見つけてみませんか。

下村紗瑛 博士後期課程3年



日本文学研究室の図書

## 現実と神秘の狭間で 美学美術史学

近世ヨーロッパの絵画では、暗い背景に光りかがやく蠟燭を設置することでばげしいコントラストを生み出す、キアロスクーロ（明暗法）と呼ばれる技法が隆盛を見せ、当節の画家たちはこぞって夜の闇を照らす焰を描くようになります。この潮流における出色の存在として、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの名を挙げておきましょう。彼の生きた十七世紀前半、躍動や絢爛と形容されるバロック様式が美術界を席卷していましたが、そのさなかに描かれたラ・トゥールの静謐きわまる神秘的な作品は、ことに異彩を放っています。沈黙する暗闇のなかで眩い光輝を放つ蠟燭、写実的な照明道具に点火された幻想的な焰、やがては燃え尽きゆく灯火を閉じこめる不変の画面、絵画という非現実を見る現実のわたしたち、……蠟燭を中心に何重にも織りなされたこれら弁証法の層によって、知らぬ間にわたしたちは、内面世界へと沈みこんでしまうことになるのです。フランスの哲学者ガストン・バシュラールが、蠟燭の「焰の夢想家が焰に向かって語りかけるとすれば、彼は自身自身に語りかけている」のだと書いているように、こうした魔術的な魅力をもつ蠟燭の絵画を見事にあらわし得た画家は、まずラ・トゥールを措いてほかにいないでしょう。

先日、パリのとある美術館で開催されたラ・トゥールの展覧会場にて、わたしは以上のようなことを漫然と考えていました。お分かりのように、ここに学術的思考などはほとんどありません。とかく高尚かつ難解なイメージをもたれがちな美術ですが、知識という鎧を脱ぎ去って作品そのものと対面し、省察に耽ることもまた必要だと、わたしはつねづね考えているのです。教養があればおもしろいのは事実ですけど、それは次の段階にすすんでからの話として。

平松瑞基 博士前期課程2年

展覧会場の《鏡の前のマグダラのマリア》  
（ワシントン、ナショナル・ギャラリー）  
（筆者撮影）



# 月刊 名大文学部

## 第 151号

隔月刊行



編集発行：  
名古屋大学文学部広報体制委員会  
koho@hum.nagoya-u.ac.jp  
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。  
2026年5月11日発行